

令和4年（2022）度 第2回 大阪府立西成高等学校 学校運営協議会 記録

【日時】 10月15日（土）10：00～12：00

【場所】 大阪府立西成高等学校 多目的室 A

【出席者】 西成高等学校校長 山田勝治・教頭 笠原英樹・事務長 橋本知幸
PTA 会長 山下佳織・梅南鋼材株式会社代表取締役 堂上勝己
A'ワーク創造館館長 高見一夫・Office ドーナツトーク代表 田中俊英
にしなり隣保館スマイルゆ〜とあい事務局長 西田吉志・大阪大学特任教授 榎井緑
大阪府立大学教授 西田芳正・大阪市立鶴見橋中学校校長 緋田隆平

- 【内容】
1. 開会
 2. 校長挨拶
 3. 議事
 - （1）今年度の学校改革の様子
 - （2）「令和4年度 地域協働キャリアセンター（学校経営推進費）」について
 - （3）その他
 4. 閉会

【事務局からの説明及び各委員からの意見等】

（1）今年度の学校改革の様子

○始業時間の変更について

- ・今年度より始業時間が8：35から9：35に変更になった。
理由として以下3点があげられる。
 - ①経済的な理由等で夜遅くまでアルバイトしている生徒が睡眠時間を確保し、朝の授業に集中して取り組めるようにする。
 - ②教員が午前中に会議等を実施し、放課後は生徒対応に時間を使えるようにする。
 - ③子育てをしている教員も1時間目から授業を持てるようにする。
- ・1ステージ末に行った始業時間変更についてのアンケート結果は以下の通り。
生徒 多くの生徒が肯定的にとらえており、「たくさん寝られる」「朝の時間に余裕ができて遅刻が減った」などの声が上がった。
否定的な生徒の声として「バイトに間に合わない」「電車に間に合わないため働く時間が減った」などが見られた。

教員 肯定的な意見として「放課後に生徒対応ができる」「会議を朝にできる」「子育てをしなくても働きやすい」などがあつた。

否定的な意見として「子供より保護者のほうが家を出る時間がはやく、学校に間に合うように出発することをうながせない家庭がある」などがあつた。

- ・ 昨年より 35 日程度授業実施日数が多いことをふまえ、昨年度と比べて今年度の欠席者数と遅刻者数の変化を分析した。総数で見ると、遅刻・欠席者数は増えているが、一日平均で計算すると、減少している。また生徒ごとの遅刻回数を分析すると、数回の遅刻をする生徒は減少傾向にあるが、遅刻を繰り返す生徒は増加傾向にあることが分かつた。

〈改革を行って学校の雰囲気はポジティブになっているように思える。しかし遅刻・欠席について件数そこまで減らなかったことを考えると、数値を見て批判する人もいる。〉

⇒ 一日ずつ見れば遅刻件数は少しずつ減少傾向にある。一方で遅刻を繰り返す生徒は増えている。そこにどう声掛けをするか。個別の問題に照らし合わせて考え、問題解決に導いていけるかもしれない。少しずつ現状を改善し、クラスで遅刻を減らす雰囲気を作っていくこともめざせる。

〈学校のねらいをふまえ、生徒の睡眠時間や授業における集中度合いについて調査を行い、数値的な結果を分析してみてはどうか。〉

〈近年、高校は私学や通信制を選ぶ生徒が増えている。その中で府立高校はどうあるべきか。〉

⇒ 通信制は、やりたいことが決まっている・目標を持っている生徒にはいいが、その分自立性を求められる学校である。そのため、朝起きられないから通信制を選ぶという生徒には向かない。ならば昼の学校は、朝の時間を遅くするなど、緩和しながら徐々に生徒の社会性を育てていけばよいのではないか。

⇒ 西成高校でも課題も多いが、印象として朝起きている生徒が増えている。一歩進んでいるように感じている。始業時間が遅いのは、社会に出てからのリズムにあっていないのではないかなどの意見もあるが、業種でも異なる始業時間を考えれば一長一短である。

○定期考査の廃止について

- ・ 今年度より、観点別評価に対応するため、また「学習」そのものに重きを置くために定期考査を廃止した。
- ・ 生徒へ行った定期考査廃止に関するアンケート結果ではおよそ半数が肯定的にとらえている。理由として「授業のほうが好きだから」などがあつた。否定的な意見として、「テストで巻き返

していたから」「自分の学習結果が数値で見えないから」「テストがないと勉強する気が起きない」「定期テストがない分小テストが増えたのがいや」などがあがった。

- 成績への影響として一年生の多くの科目で欠点者の人数が大きく減少した。全体的にも減少傾向にある。

→このような学校改革について半数以上の生徒が肯定的に捉えており、数値も改善傾向にあるため、来年度以降も踏襲していく予定である。

〈考査がなくなったことに対して「テストで巻き返せない」など否定的な意見を持つ生徒がいることに対しては?〉

⇒ これまでの考査では、言わば大学入試がベースで、授業でやったことを覚えているかを試していた。テストの結果ではなく、「学習経験」そのものを評価することで、これまで授業を頑張ってもテストの日に休んでしまったり点が取れなかったりした生徒のような、テストにより成績が大きく左右されることに対しての平坦化ができるのではないかと考えている。

〈観点別評価は生徒にどのように説明しているのか。〉

⇒ 年度初めにオンラインでの教務課長からの一斉説明を行い、各教科の教員からも説明している。2・3年向けに、急な変更での混乱がないように、1ターム50点満点の点数性にして2通りのやり方を実施している。

〈主体的態度をどう評価するか。〉

⇒ 当初は授業に来ていれば評価できるのではとなっていたが、それでは生徒に学習活動・結果を求めなさすぎる。教員により、やり方は各々ではあるが、システムとしては、生徒が個別に目標を設定し、それに対してどう変化があったかを評価して行けるものになっている。生徒一人ひとりの得意・不得意を認めながら評価をしていく、また個人での自己評価を教員が総括的に評価していければいいのではないかと考えている。

〈自己評価を行う際、自分に厳しい生徒ばかりならばいいが甘い生徒もいる。企業であれば上司のやり方に偏りが出るため、他の部署から評価するという方法をとることもある。〉

⇒ 評価は対話であると考えている。コミュニケーションウィークが対話のきっかけになり、そこから評価していければ良い。

〈評価は生徒の力を伸ばすためにやることであり、そのためにどうするべきなのか、また次の目標を与えることも大切である。自己評価を評価に組み込むことで、好き嫌いで評価に偏りが出ることがないように、複数の目で評価することも必要である。〉

⇒ 複数の教員での評価をしようとするとオーバーワークになってしまう。教員の負担にならない評価のあり方を考えたい。

〈新しい制度と、これまでの付け方での欠点とでどう違うのかサンプリングがあるといい。〉

⇒ これまでは一定の出席がない生徒は成績を保留していたが、今年度からは1回でも出席すれば成績を出すシステムになっている。また未履修（オーバー）になるラインを緩めたことで、履修条件は緩和された。これらの改革がどのような結果になるのかこれからも見ていきたい。

〈デジタルトランスフォーメーションが言われる世の中で、情報やパソコンの授業はどれくらいやっているのか。〉

⇒ 新課程に合わせてやっている。一人一台端末も活用することで、生徒は皆ある程度のPC活用ができるようになっている。

（2）地域協働キャリアセンターについて

- ・「自立した社会人」として活躍できる人材育成を目的としたキャリア教育を推進していく。その為に「地域協働キャリアセンター」を立ち上げ、学校と地域をつなぐ部署を設置する。今年度はA' ワーク創造館と協働して進めていく。
- ・今年度取り組んで行きたいこと2点は以下の通り。
 - ①西成区内の企業と引き続き協力しながらも、新規開拓を行っていく。インターンシップやアルバイトを通して、働くことの意識付けをめざす。
 - ②卒業生の働いている事業所から卒業生を招き、講演を行ってもらう。これにより3年生に働くことの意識付けをしてもらうことで、早期退職を防ぐことをねらう。

〈卒業生の勤務実態として、無断遅刻や欠席はそこまで多くはないが、体調を崩す子が多く、早期離職につながっている。内定が出てから働き始めるまでに何かできることがあるのでは。〉

〈企業としても生徒に合わせて支援したいと思うが、現実的に厳しいものがある。〉

⇒ 中学校から高校への接続もそうだが、高校から企業への接続も難しい。

〈定着支援を行っている、卒業生が退職を考えている時に学校に相談することが多く、生徒と教員の繋がりがあがるように感じている。こういった学校との繋がりがあがる一方、社会がどう支援するか悩ましい。ご飯を3食食べていない、同期もおらず辛さを言葉にできないなど、生活の不安定さが要因かと思われるが、そこから救われるための社会でのサポートを知らない。何らかの社会での安全装置があれば在校生の安心感にも繋がる。〉

⇒ 教員も移動があるので繋がりがキープできるかは不安なところである。定着支援としては事業所さんに働きかけていただくことでうまくいっている印象がある。

(3) その他

○転退学調査データについて

- ・転退学は3月が最も多い。次に10月～12月が多く、欠時により履修ができない科目が出てきたからの判断によると分析する。
- ・転学先は桃谷高校通信・ルネサンス大阪・長尾谷高校・N高校の順で多い。間口が広い学校の率が上昇している。

○進学データについて

- ・かなりの生徒がやめることなく続け、卒業している。
- ・お金のことなどが理由となり、退学している生徒もいる。
- ・4年制大学への進学は学費・学力などで依然ハードルがあり、目的がはっきりしている専門学校の方が進学に適しているのではないか。

○教員の勤務時間集計

- ・改革で勤務時間が伸びたという声があり、調査を行った。
- ・2018年に働き方改革を実施。
- ・新型コロナウイルスの影響で2020年・2021年は勤務時間が少なかったため比較対象外としたが、その前の2019年を比べると今年度勤務時間は減っていることが明らかになった。

以上